

○研究プロジェクト 「広域連携 DMO のためのインバウンド観光マーケティング」

開催責任者 経営学部 奥田 隆明
連続講演会 第1回 2017年9月12日
坂本公民館 2-1 学習室
第2回 2017年9月21日
南山大学 J棟 4階 415 会議室



研究プロジェクトは以下のとおり、開催された。

◇目標

広域連携 DMO の取組について整理し、今後、必要になるインバウンド観光マーケティングの手法を明らかにすることを目的とし、以下の研究会を公開で開催した。

◇講師および題目

<第1回研究会>

題目：中津川市リニアのまちづくりビジョン～観光振興の視点から～

講師：森 晃（中津川市リニア対策課）

<第2回研究会>

題目：広域連携 DMO のためのデータベース～現状と今後の課題～

講師：宮崎俊哉（三菱総合研究所地域創生事業本部）

また、これに加えて、非公開で以下の情報収集を行った。

題目：DMO 観光地経営のイノベーション～DMO による観光地経営の未来～

講師：高橋一夫（近畿大学経営学部）

題目：中央日本総合観光機構の欧米豪誘客戦略

講師：アシュリー・ジョン・ハーヴィー（中央日本総合観光機構）

題目：中部国際空港の現状分析と今後の利用促進に向けた検討

講師：吉澤智幸（運輸総合研究所）

◇研究プロジェクトの討論内容

<第1回研究会>

2013年には中津川市で「リニアのまちづくりビジョン」が策定され、「訪ねてよし」「住んでよし」のまちづくりを推進するために、1)体験・滞在型観光の推進、2)多様な機能の誘致、3)移住・定住、二地域居住の促進、4)車両基地の活用、5)癒しの駅前づくりが提案されている。また、現在、リニア新駅（図1）への交通アクセスの改善、リニア新駅周辺を「癒しの非日常空間」とするための準備が進められている。他方で、2014年には岐阜県で「リニア中央新幹線活用戦略」が策定され、1)広域的な効果の波及、2)大都市機能の分担、3)独自の魅力発揮の3つの視点が示されている。また、観光振興・まちづくり戦略として、1)東美濃ふるさと街道（南北観光軸）、2)いにしえ街道（東西観光軸）が提案され、2017年7月には沿線の観光協会・市町・県によって「ひがしみの歴史街道協議会」が設立されている。財界でも中部経済連合会と沿線の商工会議所が「ツーリズム東美濃協議会」を設立し、沿線の連携強化に取り組んでいる（図2）。



図1 リニア岐阜県新駅



図2 ツーリズム東美濃協議会

<第2回研究会>

2016年度には中部運輸局が「昇龍道マーケティング戦略策定事業」を実施し、1)現状分析、2)マーケティング戦略における目標及びKPIの設定、3)PDCAサイクル実現に向

けた仕組みの構築などについて検討が行われた。現状分析のためのデータベースとしては、1)海外市場における訪日旅行商品調査、2)観光統計の調査票データを用いた特別集計・分析、3)中部空港での昇龍道訪問地満足度調査、4)携帯端末の位置情報による観光客流動調査などが実施されている。また、DMO は機能を検討した上で、相応しい組織を立ち上げることが重要であること、地域関係者の合意形成のためには納得感のある効果が必要になることなどが指摘された。また、PDCA の実現のためにも目標を明確にした上で、賛同者によってさらに新しい組織を立ち上げることも必要であること、外部人材の活用や広域連携 DMO・地域連携 DMO・地域 DMO の連携も重要であることが指摘された。

<その他>

今年 5 月に設立された広域連携 DMO（中央日本総合観光機構）は、これまでの中華圏やアセアン諸国からの集客だけでなく、欧米豪からの集客にも力を入れようとしている。また、中部圏はこれまで団体の集客を得意としてきたが、もはやインバウンド観光の中心は個人客にシフトしているため、デジタル・マーケティングを活用した個人の集客にも積極的に取り組もうとしている。現在、中央日本総合観光機構は、1)イメージ戦略の展開、2)旅行会社との協働、3)観光資源の発掘、4)中部空港等と連携したアクセスの改善の 4 つを活動領域としている。特に、1)イメージ戦略の展開では、中部圏の歴史や文化を分かりやすく伝えることが重要であり、大学もそのコンテンツづくりに協力することが必要である。また、3)観光資源の発掘では、大学の外国人教員や留学生に対する期待も大きく、外国人の視点から中部圏の観光資源を再発見し、その魅力を海外に情報発信していくことが必要である。さらに、2)旅行業者との協働や、4)中部空港等と連携したアクセスの改善では、グローバルな視点から新しいプロジェクトを提案できる人材や、分野横断で協働できる人材の育成が重要である。大学も中部圏のインバウンド観光を推進する上で、きわめて重要なプレイヤーであることは間違いない。



図 3 昇龍道



図 4 新しい観光ルート

<研究プロジェクトの成果>

これまで中部圏では北陸と東海を結ぶ広域観光ルートとして「昇龍道」を提案し、中華圏やアセアン諸国に積極的なプロモーションを行ってきた(図3)。また、こうしたインバウンド観光による広域連携をさらに推進するために、幾つかの新しい観光ルートも提案している(図4)。しかし、こうした広域連携を実現するためには、観光事業者のみならず、宿泊事業者や商業事業者、交通事業者、行政などが広域的に連携する必要がある。そのため、これまで実施してきた取組の事後評価を行い、その成果と課題を踏まえて今後の取組をさらに明確なものにしていく必要がある。そこで、この研究プロジェクトでは、訪日外国人の周遊行動と観光産業の集積を考慮した周遊型観光モデルを開発し、観光地のネットワーク化を分析・評価する新しい手法を開発することを試みた。

◇研究成果発表

奥田隆明、「訪日外国人流動表を用いた旅客 IO モデルの開発」、土木学会論文集 D3 (土木計画学)、Vol.73、No.3、2017年9月。

奥田隆明・劉哲智、「国際航空路線の就航による受益地域の特定」、日本地域学会第54回年次大会学術発表論文集、2017年10月。

奥田隆明・長谷川高則、「訪日外国人を対象にした周遊型観光モデルの開発」、応用地域学会第31回研究発表大会、2017年11月。